

南山大学社会倫理学研究所 2022年度第1回懇話会

証言的不正義、認識の不運、変容の責任

佐藤 邦政
(茨城大学)

2023年2月4日(土)
@南山大学社会倫理研究所

目的

- 認識的不運のせいで証言的不正義の加害者となるケースにおいて、単に不運だったかどうかの観点では漏れ落ちる加害者の責任について変容という観点から検討する。



構成

- ①問題設定
- ②認識的不運の分析
- ③議論のどこが誤っているのか
 - (a) 再帰性
 - (b) 偏見の政治性
 - (c) 加害者の特性
- ④ 不協和の徳と変容的責任

証言的不正義

- ・証言的不正義の中心事例

話し手の社会的アイデンティティに対する偏見的ステレオタイプのせいで聞き手が話し手の信用性を不当に評価し、その話し手の証言者としての能力を貶める(e.g., Fricker 2007, 28)。

具体例『リプリー』

造船業の大富豪ハーバート・グリーンリーフが、放蕩息子のディッキーの婚約者だったマージ・シャーウッドに、ディッキーの失踪の原因について述べようとする場面で「女の勘とは別に、事実というものが存在するのだよ」といって教え諭す場面

具体例『リプリー』



潜在的バイアスとしての偏見

- ・証言的不正義は偏見的ステレオタイプに起因するものであり、このステレオタイプは特定の社会的アイデンティティに対するイメージの形態を取るために、その所持者自身が気づかないうちに証言的正義を犯していることがある。

現在の心理学やその哲学研究では、ステレオタイプは潜在的バイアスとして非反省的に機能しうることが指摘されている。

社会構造的な偏見

- ・偏見は社会規範や制度に浸透しているという意味で社会構造的なものがある。
 - ・認識主体としての私たちは社会的・歴史的に位置づけられた人物である。
- ⇒構造的偏見には個人の反省では気づく(「私は偏見をもっているかもしれない」という信念をもつ)のが困難。

構成

- ①問題設定
- ②認識的不運の分析
- ③議論のどこが誤っているのか
 - (a) 再帰性
 - (b) 偏見の政治性
 - (c) 加害者の特性
- ④ 不協和の徳と変容的責任

認識的不運

- ・証言的不正義が社会構造に組み込まれた潜在的偏見のせいで生じ、その偏見に影響を受けた信用性判断も自動的に行われると、加害者が気づかずに不正を犯していることがある。
- ・そのような加害者の責任を論じるために、フリッカーは認識的不運という概念を用いて説明している。
- ・拡大的に補足して理解する必要がある。
⇒結果的な不運、状況的な不運、構成的不運、状況的・構成的不運の四種類に区別できるだろう。

結果的な不運

・特にT.ネーゲルとB.ウィリアムズの議論以降、現代の道徳哲学で活発に議論されている。

結果的な道徳的不運: Sが結果的な道徳的不運に遭うのは、Sが自分で回避できない行為のせいで他者に道徳的に悪い結果を及ぼすとき、そのときに限られる。

偏見にかかわる結果的な道徳的不運: Sが結果的な道徳的不運に遭うのは、Sが偏見のせいで行った行為話し手の証言を不当に軽視する、あるいは、無視するとき、そのときに限られる。

結果的な認識的不運(証拠主義ベース): Sが結果的な認識的不運に遭うのは、Sが偏見のせいで証拠に基づいて信念を形成しないとき、そのときに限られる。

Sは偏見に整合的な証言を信じる(偏見的信念を形成する)、偏見と矛盾する証言を信じないことになるだろう。

状況的な認識的不運

- ・**状況的な認識的不運**：Sが状況的な認識的不運に遭うのは、偏見(的イメージ)がSの占める状況(社会規範や制度)に組み込まれているとき、そのときに限られる。
- ・私たちの認識的論的関心は、認識主体が、自分の状況から悪い認識的財(good)(潜在的偏見)を非難されない仕方で引き継いでおり、その結果、証拠に対する動機づけられた誤った調整という認識的過失があらかじめ集団によって舞台裏で犯されているケースにあり、そして(私たちは、主体自身がこのことの認識に失敗しているのを非難されるような怠慢であったわけでもなければ、当該の集団のメンバーであることが彼女を悪い認識行為の一部分を担う個人であることにもならないと規定している)。このことは、私たちが、状況的な認識的不運の一種と考えるようなものを表している。もっと言えば、その主体がかかわっている判断のパターンの認識的意義をその人の視界から覆い隠すような認識的不運を表している。(Fricker 2016, 45)

不十分な点

- ・認識的な状況的不運は、偏見が気づきにくい(あるいは、自分が偏見をもっていると疑うべき理由にアクセスできない)という直観を完全には捉えていないと思われる。
- ・たとえば、現代社会に暮らすある人が現実(現在の)世界から、可能な世界にタイムトラベルをして、たとえば、高度経済成長期の日本にトラベルすると考える。この社会では経済、教育、法律、科学などの様々な制度において家父長的イデオロギーが蔓延している。しかし、この人物は、ジェンダー平等の価値が(少なくとも不十分にでも)広がる社会で多くの人々がもつのと同様の信念や感受性をもっているとすると、タイムトラベル先の家父長的イデオロギーに満ちた社会でもそれを保つことだろう。

構成的不運

構成的な認識的不運: Sが構成的な認識的不運に遭うのは、Sが構造的偏見に一致する価値を内在化させるタイプの人物として構築されているとき、そのときに限られる。

『リプリー』におけるグリーンリーフはジェンダー偏見が社会規範に浸透している社会に生まれ育ち、長く暮らしたことで、偏見的な社会規範に気づけない人物に構築されている。

より正確な言い方をすれば、グリーンリーフのケースは、状況的不運と構成的不運の複合体を示している。なぜなら、マージに対する自分の信頼の不足を疑うべき理由をもてない人としてグリーンリーフを構成してきたのは、とりわけ歴史的状況であるからだ。そのため、彼は歴史的・構成的な形態の認識的・道徳的不運に見舞われている、と言おう。(後略)(Fricker 2007, 100)

状況的・構成的な認識的不運

・ある社会で偏見が浸透している状況が存在しないならば、その偏見に一致する価値を内在化させるタイプの人物が現れることは極めて想像しにくいだろう。

このことが正しいなら、偏見に反省的に認識的アクセスができないのが説明するのは、状況的・構成的な認識的不運であるだろう。

状況的・構成的な認識的不運：Sが構成的な認識的不運に遭うのは、偏見がSの占める状況（社会規範や制度）に組み込まれており、かつ、Sが構造的偏見に一致する価値を内在化させるタイプの人物として構築されるとき、そのときに限られる。

反省的な形態の不運

・以上の四つの認識的不運に共通する特徴は、これらの認識的不運は反省的な形態の認識的不運であることである(Prichard 2005; 2006)。

反省的な形態の認識的不運: Sがどれほど自己内省しても自分の偏見に無知であり、そのために認識的不運を被ることである。

内容

- ・状況的・構成的な認識的不運を被っている証言的不正義の加害者は、その過失の責任を負わない。
- ・フリッカーは、認識主体の行為者後悔として非難に値しない責任(no-culpable responsibility)について論じている(Fricke 2016)。この責任は、大まかに言えば、自分では避けえなかった偏見的判断に対して非難されるべきではないとしても、後から「もっと何かできたのではないか」と後悔するような(非難に値しない)認識的責任があるというもの。
- ・この議論の前提となっている、認識的不運を被っているために偏見を認識できないという前提は妥当なのだろうか。

構成

- ①問題設定
- ②認識的不運の分析
- ③議論のどこが誤っているのか
 - (a) 再帰性
 - (b) 偏見の政治性
 - (c) 加害者の特性
- ④ 不協和の徳と変容的責任

偏見に対する再帰性の役割

- ・偏見が構造的なものであることから、偏見に満ちた信用性判断を行っても反省では気づきようがないことを導く推論が疑わしい。

- ・偏見と、その偏見に満ちた信用性判断は非反省的に行われるため、偏見的な信用性判断に対しては反省が役に立たないと主張するものである。

- ・しかし、自己反省の対象は、偏見に向けられる種類に限定されない。

(a) 自分の社会的立ち位置(positionality)や対人関係性(relationality)に向けられる種類

(b) 「偏見をもっているかもしれない」という信念に向けられる種類

(c) 話し手の証言内容それ自体に向けられる種類

(a)

- ・自分の社会的立ち位置と対人関係に対する反省

『リプリー』の事例で証言的不正義を犯すグリーンリーフは(パターナリスティックなものではあるが)マージのことを気遣っているにもかかわらず、彼にはその時代に自分が男であるということによって女性に対してもつ社会的優位性への自覚が不十分であり、その優位性のせいでマージを不利な立場に追いやっていることへの警戒心も見られない。(Fricker 2007, 91)。

- ・もちろん、自分の特権的な社会的な立ち位置や対人関係性が話し手の証言的態度にどのような影響を与えるのかは自己反省によって完全に把握できるとは限らない。

- ・それでも自分の社会的立ち位置や対人関係性をあらかじめ十分に自覚することで、話し手を追い込んでいるかもしれないリスクに警戒することは可能だろう。

(c)

- 相手の発言内容そのものに対する反省によって、証言を受容する態度をもつことが可能である。
- ある命題を真として受容することは、その証言を信じることは区別され、証言的信念の形成や拒否が意志でコントロールしえないと想定されるのに対して、その証言の受容にかんしては認識主体が意志的にコントロールする(Engel 1998, 146-7)。

たとえば、『リプリー』の事例においてグリーンリーフは、マージから「ディッキーマーはリプリーによって殺害された」という可能性を告げられるとき、彼女の証言は自分の諸信念と不整合であるがゆえにその場では彼女の証言を信じないとしても、一時的でもその証言を受容することは意志的に可能であったかもしれない。(ただし、グリーンリーフが状況的・構成的不運を著しく被っているとするなら、どうか。原理的に受容は可能でも、実践的には難しかったかもしれない。それでも)

偏見の政治性

- ・証言的不正義は、その原因である偏見が構造的なものである以上、原理的には誰もが被害者となりうるはずであるにもかかわらず、一部の人しか不正義を被っていないことへの注目が十分になされていない。
- ・たとえば、「ハーフ」や「ダブル」と呼ばれる人々に対する偏見（現在では、差別語の「混血児」に対する差別）は、「日本人性」への偽なる盲目的イメージ（たとえば、日本は純血の日本人からなると思いついでいる）が深くかかっているとされる。
- ・ドットソン(Dotson 2017)は、抑圧がジェンダー偏見といった単独のものに起因するといった考えを批判し、複数の様々な要因が絡んでいることに注目する「アイデンティティの政治性」を提案している。たとえば、黒人女性は「女性であること」で男性から不当な扱いを受けただけでなく、「黒人である」ということで第二派フェミニズム運動における中心的な権力を担った白人女性からも虐げられてきたように、社会的アイデンティティに対する偏見は複雑なインターセクショナルリティが絡んでいる。

被害者の批判意識

- 実際に証言的不正義の道徳的結果の被害を受けている人々がいること、そのうえで被害者のなかには「不当な目に遭っている」という批判意識をもつ人がおり、すべての人が偏見やイデオロギーに原理的に反省を向けることができない、というのは疑わしい。
- フリッカーの議論は、証言的不正義の可能性に何らかの仕方で疑えるなら、その場合には「偏見的ステレオタイプを是正すべき」という規範理由をもち、様々な自己反省をするように促される可能性のある人物という意味で善意の人々を想定している(Fricker 2007)。
- 被害者の視点から証言的不正義に抵抗するあり方については、フリッカーの議論とは独立に丁寧に検討する必要がある。
- 被害者は深刻な心理的害などのせいで、抑圧からの解放を目指すうえで重要な徳の獲得を不当に妨げられているケースがある(Tessman 2005; Dillon 2012)。さらには、加害者に対する抵抗は二次被害を誘発するリスクも高く、反動的に抑圧を深刻化させる場合もあり、社会的に弱い立場にある被害者が生き延びるためには、通常悪徳と見なされる閉じた心や従順さ(servility)を発揮せざるをえない場合もある(e.g., Battaly 2018)。

認識的不運への評価

- 認識的不運(状況的・構成的不運)は、余程のきっかけがなければ避けるのが難しいという意味でかなりの不運と言えるようなものだろう。
- しかし、結果的な道徳的不運に比べると、(たとえ状況的・構成的不運に陥っていても)事後的ではなく、証言的不正義の進行中に何かがおかしいと気づく可能性があるという意味では完全に不運とは言い切れない。

構成

- ①問題設定
- ②認識的不運の分析
- ③議論のどこが誤っているのか
 - (a) 再帰性
 - (b) 偏見の政治性
 - (c) 被害者の批判意識
- ④ 不協和の徳と変容的責任

不協和の徳

- 構造的偏見による証言的不正義の加害者は、自分の偏見的イメージや偏見的信念に気づきうるのにあえてそれを見ないような認識的な悪徳者であるとは限らない。
- 加害者は何らかの責任を引き受ける徳をもつ者でありうる。反省的熟慮により証言的不正義を犯しているかもしれないリスクに気づきさえすれば「偏見を是正すべきという規範理由をもつ」意味での善意の人物というのを想定しうる。
- このような人々をどのように、ほとんど不運と言えるような（しかし、完全に不運であるとは限らない）証言的不正義の陥穽を理解させ、どのような責任を負うと考えうるのかは重要な問題の一つである。

徳と責任

・倫理学者スーザン・ウォルフ(2013)は、自分に完全に過失があるわけではない行為の結果に対して、その結果に対して何かなしえたのではないか、あるいは、何を被害者に何かするべきなのではないかと促される意味で道徳的徳としての責任について論じる。

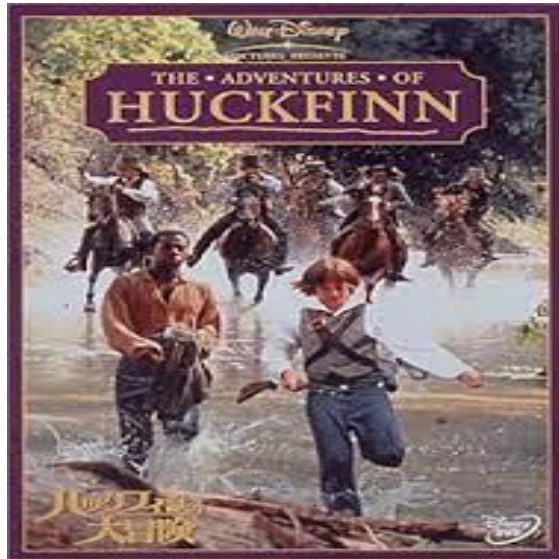
自分の行為とその結果の責任を引き受ける徳として表現できるような、私たち誰もが薄々気づいており、称賛すると思われる徳がある。残念なことに、これは名前のない徳であり、私にはどのように分かりやすい名前を提案してよいのかわからない。これは「人が行うこと」の領域を(中略)狭く取るのではなく広く理解し、その人の行うことに責任を負うと見なされることを予期し、すすんでそうしようとしつつ生きる、ということにかかわるものである。(中略)気づかないうちに誰かを不快にしたり傷つけたりしていたら、守りに入るのではなく、相手に謝罪するよう促す徳である。ひよっとすると、この徳は、自分の行為とその結果だけではなく、広い意味で自分の守備範囲に入るいっそう広範囲の状況を引き受けることにかかわる広い徳の一部、ないしは、そのような徳の一側面なのかもしれない。(Wolf 2013, 13)

認識的徳としての責任

- ・証言のやり取りにおける話し手を認識主体として知らずのうちに偏見で知覚することに対して、自分の知覚や信念が何かおかしいところがあるのではないかと促される場合にも言えると思われる。
- ・証言的不正義の加害性に対する(過去向きの)行為者後悔だけではなく、現在進行形の出来事において自分の偏見に何かのきっかけで気づき、目の前の他者に対してどのようにあるべきなのか逡巡し、既存の判断や行為を控えるような態度がある。このきっかけは、基本的に目の前の他者との証言のやり取りであるだろう。
- ・これを一種の責任と呼べるとすると、どのような責任なのか。
⇒認識主体が多様な仕方で再帰的な自己反省を行うなかで、逡巡したり葛藤したりすることへの注目。

『ハックルベリー・フィンの冒険』

・主人公のハックは逃亡者の黒人青年ジムと出逢い、旅中とともに時間を過ごすなかでハックの眼にはジムが信用に足るように映るようになる。その一方でハックは、ジムが奴隷の法的所有者のもとから脱走しており、ジムの匿うことは逃亡ほう助の罪に問われるという世俗的信念をもっている。ハックは心のなかで葛藤しながらも、最終的にジムの警察に引き渡さなかった。



不協和の意味

・ハックが黒人のジムと証言のやり取りするなかで不協和を感じたとき、この不協和の経験は、黒人について世間的な証言的知識とは別の知識を獲得するだけでなく、目の前の青年に対して自分はどのようにあるべきなのかがハックにとって自分事となっている。

⇒不協和は、自分のなかに潜在していた偏見的イメージの自覚し始める一方、これまで周りの人々から語られて信じてきた証言的信念を疑ってよいのか戸惑いながら、目の前の話し手に対してどのように自分はあるべきなのかというのっぴきらない問いを誠実に受けとめていることを示している。

不協和の徳

・認識主体が逡巡したり葛藤したりすることは、単に自分の信念が偽であるかもしれないことを超えて、その時代の風潮や社会に流布している正義にかんする世俗的構想に飛びつかず、正義にかんする既存の構想が真ではない可能性を(うすうすでも)認識し、この個別の文脈における目前にいる特定の話し手に対していかにあるべきなのかという個別具体的な正義の構想を熟慮するように促されている。

⇒今自分の置かれている状況において個別の話し手に対して何が正しいのかを自分の認識的ニーズとすることは一種の道徳的・認識的徳としての変容的責任。

その位置づけ

- ・遠く隔たった別様な見方や考え方を鮮やかな想像することや、話し手を曇りのない仕方で有徳な知覚ができることは重要ではある。しかし、そのような有徳者になることはハードルの高い要求だし、実践上そのような想像力と知覚能力の獲得には相当な習熟が必要。
- ・その一方で、変容的責任は決して簡単に果たしうる低い要求でもない。平等主義的価値観が浸透した現代社会では、「私は(マイノリティの)あなたの味方だよ」といった言葉で「味方(ally)」としてのアイデンティティを示す人々が現れている。しかし、マッキノン^{McKinnon}は、そういった人がいざ相談を受けると話し手の話を真剣に受け止めずにガスライティングとしての二次的害を与えるケースがあることが指摘する(McKinnon 2017)。

参考文献

- 荒井裕樹 (2020). 『障害者差別を問いなおす』. 筑摩書房.
- Callard, Agnes (2018). *Aspiration: The Agency of Becoming*. New York: Oxford University Press.
- Anotony, Louise A. (2016). "Bias: Friend or Foe?" In Michael Brownstein & Jenifer Saul (eds.), *Implicit Bias & Philosophy: Volume I, Metaphysics and Epistemology*, Oxford: Oxford University Press.
- Church, Ian M. & Hartman, Robert, J. (eds.) (2019). *The Routledge Handbook of the Philosophy and Psychology of Luck*. New York: Routledge.
- Code, Lorraine (1978). *Epistemic Responsibility*. Brown University Press.
- Coffman, E. J. (2015). *Luck: Its Nature and Significance for Human Knowledge and Agency*. New York: Palgrave Macmillan.
- Collins, Patricia Hill (1990). *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment*. Boston: Unwin Hyman.
- Craig, Edward. (1990). *Knowledge and the State of Nature*. Oxford: Clarendon Press.
- Doan, Michael (2018). "Resisting Structural Epistemic Injustice." *Feminist Philosophy Quarterly*. 4(4): Article 5.
- Dotson, Kritee (2012). "A Cautionary Tale: On Limiting Epistemic Oppression." *Frontiers: A Journal of Women Studies*. 33(1): 24–47.
- Dotson, Kristie (2017). "Introducing Black Feminist Philosophy" In Garry, Ann, Khader, Serene J., & Stone Alison (eds.), *The Routledge Companion to Feminist Philosophy* (Chapter 10). New York: Routledge.
- Enoch, David & Marmor Andrei (2007). "Case against Moral Luck." *Law and Philosophy*. 26: 405–436.
- Fricker, Miranda (2007). *Epistemic Injustice: Power & The Ethics of Knowing*. Oxford: Oxford University Press.
- Fricker, Miranda (2010). "Skepticism and the Genealogy of Knowledge: Situating Epistemology in Time." In Adrian Haddock, Alan Millar, & Duncan Pritchard (eds.), *Social Epistemology* (pp. 51–68), Oxford University Press.
- Fricker, Miranda (2016a). "Epistemic Injustice and the Preservation of Ignorance." In Michael Rik Peels and Martijn Blaauw (eds.), *The Epistemic dimensions of Ignorance* (pp. 160–177), Oxford: Oxford University Press.
- Fricker, Miranda (2016b). "Fault and No-Fault Responsibility for Implicit Prejudice". In Michael S. Brady and Miranda Fricker (eds.), *The Epistemic Life of Groups: Essays in the Epistemology of Collectives*, Oxford: Oxford University Press.
- Fricker, Miranda (2016c). "What's the Point of Blame?: A Paradigm Based Explanation." *Nous*. 50(1): 165–183.
- Holroyd, Jules (2021). "Implicit Bias and Epistemic Vice." In Ian James Kidd, Heather Battaly, & Quassim Cassam (eds.), *Vice Epistemology* (pp. 194–224): Abingdon, Oxon; NY: Routledge.
- フックス、ベル (2020). 堀田碧訳『フェミニズムはみんなのもの—情熱の政治学』. エトセトラブックス.
- 栗田季佳 (2014). 『見えない偏見の科学：心に潜む障害者への偏見を可視化する』. 京都：京都大学出版会.
- López-Ayala, Saray & Beeghly Erin (2020). "Explaining Injustice: Structural Analysis, Bias, and Individuals." In Erin Beeghly & Alex Madva (eds.), *An Introduction to Implicit Bias: Knowledge, Justice, and the Social Mind* (pp. 211–232). NY: Routledge.
- McKinnon, Rachel. (2017). "Allies Behaving Badly." In Kidd, Ian J., Medina, José, and Pohlhaus, Gaile (eds.), *The Routledge Handbook of Epistemic Injustice* (pp. 167–174). NY.: Routledge.
- Medina, José (2013). *The Epistemology of Resistance: Gender and Racial Oppression, Epistemic Injustice, and Resistant Imaginations*. New York: Oxford University Press.
- Medina, José (2016). "Ignorance and Racial Insensitivity." In Rik Peels & Martin Blaauw (eds.), *The Epistemic Dimensions of Ignorance* (pp. 178–201). New York; London: Routledge.
- Nagel, Thomas (1979). *Mortal Questions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- NHK (2020). 「マイクロアグレッション 日常に潜む人種差別の“芽”」. <https://www.nhk.or.jp/gendai/comment/0018/topic008.html> (最終アクセス2023年2月1日)
- Paul, Laurie A. (2014). *Transformative Experience*. Oxford: Oxford University Press.
- Paul, Laurie A. (2015). "Transformative Experience: Discussion and Replies." *Res Philosophia*. 92(2): 760–765.
- Peels, Rik (2015). "A Modal Solution to the Problem of Moral Luck." *American Philosophical Quarterly*. 52(1): 73–87.
- Peels, Rik (ed.) (2017). *Perspectives on Ignorance from Moral and Social Philosophy*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Peels, Rik & Blaauw, Martin (eds.) (2016). *The Epistemic Dimensions of Ignorance*. New York; London: Routledge.
- Piovarchy, Adam (2021). "Responsibility for Testimonial Injustice." *Philosophical Studies*. 178: 597–615.
- Pritchard, Duncan (2005). *Epistemic Luck*. Oxford University Press.
- Pritchard, Duncan (2006). "Moral and Epistemic Luck." *Metaphilosophy*. 37(1): 1–25.
- Pritchard, Duncan (2021). "Ignorance and Inquiry." *American Philosophical Quarterly*, 58(2): 111–123.
- Sato, Kunimasa (2021). "Good Learning and Epistemic Transformation." *Episteme*. DOI: <https://doi.org/10.1017/epi.2021.15>.
- Saul, Jennifer (2013). "Scepticism and Implicit Bias." *Disputatio*. 5(37): 243–263.
- Sher, George (2009). *Who Knew? Responsibility without Awareness*. Oxford: Oxford University Press.
- Sussman, David (2018). "Is Agent-regret Rational?" *Ethics*, 128: 788–808.
- Williams, Bernard (1981). *Moral Luck: Philosophical Papers 1973-1980*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Williams, Bernard (2002). *Truth and Truthfulness: An Essay in Genealogy*. Princeton; Oxford: Princeton University Press.
- 横塚晃一 (2007). 『母よ！殺すな』. 生活書院.
- Wolf, Susan (2013). "The moral of Moral Luck." *Philosophical Exchange*, 31(1): 1–16.